

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：17701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652082

研究課題名(和文)メディアの影響を組み込んだ言語の習得と変化に関する理論モデル構想のための試み

研究課題名(英文)On the theory of language acquisition and change with the influence of media

研究代表者

太田 一郎(Ota, Ichiro)

鹿児島大学・法文学部・教授

研究者番号：60203783

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：現代社会における言語の変化はテレビ等のメディアの影響によるものと考えられることが多いが、このことを科学的手続きに基づいて検証した研究はほとんど見られない。本研究は、鹿児島方言若年層話者の発話に見られるアクセント型の交替はメディアの影響によるものという仮説を立て、発話の産出、話者要因(年齢、ジェンダー、生育地、対人ネットワーク、日常行動、言語接触の様相、友人とのつきあい、パーソナリティなど)、テレビ等のメディア利用の行動などのメディア要因の関連を検討してその検証を行った。その結果から、メディアの影響を取り入れた言語習得、変化のモデルの提示を試みた。

研究成果の概要(英文)：The mass media broadcasting is often regarded as an influential cause of language change. This comes from the fact that people have observed a huge scale of nationwide de-dialectization or dialect levelling since the 1960's after the advent of TV. However, sociolinguists have been skeptical about its effect, because there are few studies which successfully demonstrate the influence of media on language with a scientifically persuasive manner. This study attempted to provide some evidence in terms of variation theory, indicating that the media contents seem to be relevant to the tonal changes observed in Kagoshima Japanese, and to suggest a tentative view of language acquisition and language change under the influence of media.

研究分野：社会言語学

キーワード：社会言語学 言語変異 メディアとことば 方言 音調 言語変化 言語習得

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本全国の地域方言は、この数十年のうち標準語の影響で大きく姿を変えた。鹿児島方言においても脱方言化が進み、とくに若年層の日常語はすべての面で大きく標準語に接近した。

社会言語学においては、言語変化は話者同士の対面の接触を機会として伝播・拡散すると考えられてきた。しかしながら、主として地元の人々と日常生活を送る子どもたちのことばに、対面の言語接触だけで鹿児島のように大規模な脱方言化が生じるとは考えにくい。このような変化の要因としてはマスメディアのことばによる影響が考えられる。しかしながら言語変化へのテレビ等のメディアの影響を科学的手続きに基づいて検証した研究はほとんど見られなかった。

(2) 現在の鹿児島方言では、従来二型アクセントの A 型語であったものが B 型音調で、B 型語が A 型音調で産出される現象があることが指摘されている(窪田 2006 など)。従来平板式の B 型音調で発音されていた「もみじ」(LLH)が起伏式の A 型(LHL)で、逆に従来起伏式 A 型のはずの「かえで」(LHL)が平板式の B 型音調(LLH)で発音される。この「アクセント型の交替」とは、従来型の鹿児島方言では音調の下がり目のない平板式音調の「もみじ(LLH)」が、標準語では頭高の「もみじ(HLL)」と音調の下がり目を伴って発音されることをまねて、鹿児島方言でも「もみじ(LHL)」と下がり目を伴って発音されるようになること、または従来は起伏式の語が平板式で発音されることを意味する。言い換えれば、語内のピッチ下降のある・なしを標準語にそそえようとする現象と解釈できる。

2. 研究の目的

以下のふたつを目的とした。

(1) 本研究は、この鹿児島の若年層話者のアクセント型交替にはメディアの影響があるという仮説を立て、発話の産出による言語データと話者要因(年齢、ジェンダー、生育地、社会ネットワーク、日常行動、言語接触の様相、友人とのつきあい、パーソナリティなど)、メディア要因(日常的なメディアへの関わり方などのメディアに対する行動等)の関連を検討してその検証を行う。

(2) その結果を受けて、メディアの影響を取り入れた言語習得、変化のモデルの構築を試みる。

3. 研究の方法

(1) 分析の対象と方法

[[青森の][おみやげ]]のように、ふたつの語から成る複合アクセント句(以下 MAP)において生じる語アクセント型の交替がどのような要因により制約を受けているかを分析の対象とした。

音声資料の収録はスライドおよびリスト

に示される語を読み上げる単語読み、文リストの文を読む単文読み、台本のある会話、および 15 分程度の自然談話の各タスクによる。ここでは、そのうち 3, 4 音節語を含む単文読みと台本のある会話で収録した音声資料を分析した結果を報告する。現時点では、単語読みと自然談話は分析中である。

調査対象の語彙は、MAP の前部要素が「青森」「宮島」「長野」「上野」、後部要素が「おみやげ」「煮魚」「飲み屋」「煮物」の合計 8 語である。その組み合わせ数は、1) に示すように、連結部分の助詞を含めると、単文読みタスクでは合計 16、台本会話タスクでは合計 8 となり、方言と標準語のそれぞれのスタイルで各話者 24 (合計 48) のデータを収集した。この報告は、そのうち方言スタイルで得られた各話者 24 個(2 語ずつ含む)のデータの 20 人分、480MAP(960 例)の結果である。

1) [青森の/で][おみやげを]たくさんもらった

方言アクセントと標準語アクセントの組み合わせは、4 音節の「おみやげ」(鹿児島方言、標準語ともに平板式)と「煮魚」(鹿児島方言、標準語ともに起伏式)以外の 6 語は、鹿児島方言で起伏式のもの標準語では平板式、およびその逆の対応関係がある。

単文読みタスクにおいては、以下のような文をリストのかたちで調査協力者に提示し、できるだけ自然に読むよう求めた。台本会話タスクにおいては、方言話者同士 2 人 1 組で用意された台本を参照しながら、1 分程度の短い会話を行わせ、その音声収録した。

(2) 話者

話者は鹿児島市を中心として、おもにその周辺地域(薩摩半島)で生育した 20 代前半の若年層話者 20 名(男性 10 名、女性 10 名)である。

(3) 統計モデルの仮定と分析

言語変異理論では、バリエーションに関わる言語内および言語外の要因を仮定し、それらが変異形の出現に影響をあたえるか、あたえるとすればどの程度かを統計分析によって確認する手順を取る。この研究でも「ある事象が起きる/起きない(従属変数)にどのような要因(独立変数)がどれだけ影響をあたえるかを算出する」際に利用される統計分析の手法であるロジスティック回帰分析により、仮定したアクセント型交替のモデルの有効性を検証した。

【従属変数】

「標準語と同じ音調型(ピッチ下降あり/なし)であるかどうか」を従属変数とした。鹿児島方言のアクセント型交替の場合、従属変数には次の 2 つが考えられる。

2) 調査語彙の産出された音調が標準語の「起伏式」に一致する場合

「青森(あおもり)の...」(起伏式)
(標準語) LHLL-L
(データ) LLLH-L->1 (変異あり) 交替型
LLLL-H->0 (変異なし) 従来型

3) 調査語彙の産出された音調が標準語で「平板式」に一致する場合

「宮島(みやじま)の...」(平板式)
(標準語) LHHH-H
(データ) LLLL-H->1 (変異あり) 交替型
LLLH-L->0 (変異なし) 従来型

2) の場合は、たとえば「青森の...」であれば、従来の鹿児島方言では、LLLL-H のように、「ピッチ下降」のない音調(すなわち B 型)であるが、標準語では LHLL-L で「ピッチ下降」がある。この場合、鹿児島方言スタイルで LLLH-L の起伏式(すなわち A 型)で発音されれば、「起伏式に一致した」と考え、1 (=変異あり)とコード化する。一致しない(B 型 標準語型もしくは未知の型等)場合、0 (=変異なし)とコード化する。また 3) の場合は、これとは逆に従来は起伏式 A 型の「宮島の...」は、標準語では平板式音調なので、平板式の B 型であれば 1, それ以外であれば 0 とコード化する。以下、2) を「起伏式対応変異」、3) を「平板式対応変異」と呼ぶことにする。

【独立変数】

アクセント型交替の変異形出現に関与すると推測される言語内、言語外の要因は以下のとおりである。

言語内要因

・助詞(の/で), 調査語の音節数(3/4)

言語外要因

- ・スタイル(単文読み/台本会話), 社会的属性(ジェンダー(男/女), 主な生育地(鹿児島市/それ以外))
- ・現在の友人間での社会ネットワーク密度
- ・方言接触: 現在の友人間, 県外の友人, 親戚
- ・社会的実践: バイト, サークルなど
- ・パーソナリティ: 性格 5 因子
- ・メディアとの関連
 - 一週間にテレビがオンの時間数
 - 子どもの頃のアニメ視聴の度合い
 - 現在の番組視聴の度合い: 情報系番組, 娯楽系番組, ポップカルチャー系番組
- ・標準語読みで標準語音調産出の成功

これらの情報はアンケート調査で得た。従属変数と独立変数の関係をクロス集計や相関分析等である程度絞り込んだのち、最終的なモデルの候補を仮定し、その検証を行った。

【質的独立変数】

クロス集計と²検定の結果を示す質的変数と変異の関連を検討する。

「言語内要因」

助詞(の/が)と音節数(3/4)を仮定した。助詞はどちらの変異も関連性は見られな

った。一方音節数は起伏式対応変異の場合($\chi^2=26.162, p<.001$), 平板式対応変異($\chi^2=49.336, p<.001$)のどちらも関連性が推測された。

「スタイル要因」

スタイル(単文読み/台本会話)は、起伏式対応変異では関連性は見られなかったが、平板式対応変異($\chi^2=4.268, p<.05$)は関連性が見られた。

「社会的属性」

ジェンダーは起伏式対応変異で関連が見られたが($\chi^2=29.587, p<.001$), 平板式対応変異は関連が見られなかった。おもな生育地は起伏式対応変異($\chi^2=12.380, p<.001$), 平板式対応変異($\chi^2=11.203, p<.01$)ともに関連性が考えられる。

【その他の言語外変数(量的変数)】

量的変数には、対人関係, 方言接触, 日常行動, 性格など話者たちを多面的にとらえるための要因を仮定した。また, マスメディアによる言語接触との関連をとらえるために、「テレビの話をする」, 「一週間にテレビがオンの時間数」, 「子どもの頃のアニメ視聴の度合い」, 「現在の番組視聴の度合い」, 「一週間にテレビがオンの時間長」など, いくつかのメディア視聴に関わる変数を仮定した。最終的な統計分析には独立変数を絞る必要があったので, 事前の分析を行い, このうち「子どもの頃のアニメ視聴の度合い」と「現在の番組視聴の度合い」を採用した。

「現在の番組視聴の度合い」は、「ドラマ」や「バラエティ」などの 10 のジャンルで「よく見る」から「まったく見ない」の 5 件法でたずねた。そののち, すべてのジャンルを主成分分析にかけ, 次の 3 つの主成分を抽出し, 「情報系番組視聴」, 「娯楽系番組視聴」, 「ポップカルチャー系番組視聴」と名づけた(第 3 主成分までの寄与率は 56.23%)。それぞれの主成分に含まれるおもなジャンルとその影響力を示す主成分得点(カッコ内に示す)は次のとおりである。主成分得点は最大 1 で大きいほど影響力があると考えられる

情報系番組: 全国情報番組 (.831), ニュース (.631)

娯楽系番組: バラエティ番組 (.671), ローカル情報番組 (.593), 関西系バラエティ番組 (.412)

ポップカルチャー系: アニメ (.706), 歌番組 (.574)

統計解析の結果の前に情報系番組の視聴とポップカルチャー系番組の視聴, および幼児期のアニメの視聴度合い, および標準語使用能力について, 起伏式と平板式への対応を確認しておきたい。

まず情報番組の視聴だが, 起伏式対応では正の相関(相関係数 $r=.265$)が, 平板式対応にはわずかながら負の相関($r=-.110$)の傾向が見られる。次にポップカルチャー番組の視聴は, 情報番組とは逆に起伏式対応で負の傾

き ($r = -.292$) が、平板式対応では正の傾き ($r = .123$) が見られる。最後に幼児期のアニメ視聴である。平板式対応には正の傾き ($r = .214$) が見られる。一方、図示していないが、起伏式対応にはほとんど傾きは見られなかった ($r = -.003$)。

くわえてこの分析モデルでは、ピッチ下降あり/なしの選択には話者の標準語使用能力が関与するのではないかと仮定し、標準語能力を示すと考えられる変数を組み込んだ。変数は、標準語スタイルでの標準語音調と完全に一致する音調が現れた場合1点をくわえて構築した(得点のレンジ19-48 平均40.7)。平板式対応変異には正の相関が見られた ($r = .339$) が、起伏式変異はわずかに負の傾き ($r = -.088$) が見られた程度であった。

これらの変数同様、他の量的変数もグラフで視覚的にデータの分布を確認し、多変量解析への変数の決定と結果の解釈に利用した。その結果、下表に挙げた変数を独立変数とした。

カテゴリー変数	ジェンダー
	生育地
	スタイル
	音節数
量的変数	社会ネットワークの密度
	社会ネットワーク内での言語接触
	子ども時代のアニメ視聴の度合い
	情報系番組視聴
	娯楽系番組視聴
	ポップカルチャー系番組視聴
	標準語得点

(4) 統計分析とその結果

アクセント交替の説明モデルに必要なと思われる独立変数を取り替えながらロジスティック回帰分析を繰り返したあと、それぞれについて次の表のような結果が得られた。

分析結果の検討の前に、結果の読み方を説明しておきたい。B は個々の独立変数の影響度を表す回帰係数である。この場合、プラスであれば標準語のアクセント型に対応する確率が高く、マイナスであれば対応する確率が低いということを意味する。この値が大きいほどその要因の影響度は大きいと考えられる。SE (標準誤差) はバラつきの指標である。値が大きいとデータのバラつきも大きいということになる。Wald 検定値は、回帰係数が有意かどうか判断するためのものであり、自由度を利用して² 検定が行われる。その際の確率が変数の有意確率を示す。最後に Exp(B) は、ある事象の起こりやすさを表す指標(オッズ比)である。オッズ比は、その要因の変異への影響の大きさを表している。オッズ比は1を規準としてそこから離れるほどその要因の影響が大きいと解釈される。1より大きいほど起こる確率が上がり、1より小さいほど起こる確率が下がると判断できる。

たとえば「ジェンダー(女)」のオッズ比は0.25だが、これは女性という要因は男性に対しこの変異の現れる確率が0.25倍であることを意味する。

N = 480						
Nagelkerke R Square: .240						
要因	B	S.E.	Wald	df	Sig.	Exp(B)
ジェンダー(女性)	-1.38	0.27	26.84	1	0.000	0.25
生育地(市外)	0.52	0.30	3.03	1	0.082	1.68
音節数(4)	1.19	0.22	29.18	1	0.000	3.29
スタイル(台本会話)	-0.38	0.23	2.89	1	0.089	0.68
社会ネットワークの密度	-0.02	0.02	0.37	1	0.545	0.99
社会ネットワーク内での言語接触	-0.04	0.13	0.10	1	0.754	0.96
子ども時代のアニメ視聴の度合い	-0.03	0.01	5.31	1	0.021	0.97
TV1: 情報系番組視聴	0.39	0.12	9.93	1	0.002	1.47
TV2: 娯楽系番組視聴	0.18	0.13	1.77	1	0.183	1.19
TV3: ポップカルチャー系番組視聴	-0.30	0.11	7.53	1	0.006	0.74
標準語得点(単文読み+台本会話)	-0.01	0.02	0.52	1	0.469	0.99
定数	3.70	1.08	11.83	1	0.001	40.33

起伏式対応の結果

N = 480						
Nagelkerke R Square: .283						
要因	B	S.E.	Wald	df	Sig.	Exp(B)
ジェンダー(女性)	-0.16	0.26	0.37	1	0.541	0.86
生育地(市外)	-1.19	0.28	18.43	1	0.000	0.31
音節数(4)	1.52	0.21	50.77	1	0.000	4.56
スタイル(台本会話)	0.48	0.22	4.74	1	0.029	1.62
社会ネットワークの密度	0.09	0.03	10.99	1	0.001	1.09
社会ネットワーク内での言語接触	0.09	0.12	0.50	1	0.478	1.09
子ども時代のアニメ視聴の度合い	0.04	0.01	10.49	1	0.001	1.04
TV1: 情報系番組視聴	-0.14	0.12	1.49	1	0.222	0.87
TV2: 娯楽系番組視聴	-0.18	0.12	2.16	1	0.142	0.84
TV3: ポップカルチャー系番組視聴	0.27	0.11	6.22	1	0.013	1.31
標準語得点(単文読み+台本会話)	0.07	0.02	17.12	1	0.000	1.07
定数	-7.38	1.07	47.41	1	0.000	0.00

平板式対応の結果

ここでは、独立変数は質的変数と量的変数が混在しているので、Exp(B)を中心に検討を行う。起伏式対応変異では、Exp(B)の値(3.29)から音節数(4)がもっとも影響力が大きい。これは上述のように、4音節語では標準語と同じアクセント型を持つ語が4語中2語ある(起伏式、平板式それぞれ1語ずつ)ためと考えられる。次に生育地(市外)の値が大きい(1.68)。3番目に大きいのは「情報番組見る」である(1.47)。この3つが起伏式への対応(=起伏式アクセントの出現)に影響すると思われる要因である。その他の要因はすべてBが負の値をとっており、起伏式への対応の確率が低いものと考えられる。とくに「ポップカルチャー番組を見る」と「ジェンダー(女)」は統計的に有意であり、これらは起伏式の出現確率を低くすると見なされる。

次に平板式対応変異の結果である。Wald 検定有意のもので「対応」の確率が高い要因を Exp(B)の大きい順に挙げると、「音節数(4)」(4.56),「スタイル(台本会話)」(1.62),「ポップカルチャー番組を見る」(1.31),「ネットワーク密度」(1.09),「子ども時代のアニメ視聴の度合い(1.04)」となる。ここでも音節数は一番強力だが、メディア要因(ポップ

カルチャー、アニメ)などの影響も認められることは注意したい。起伏式対応の情報番組と同じく、平板式への音調の対応でもメディアが何らかの影響をもつ可能性が示唆されていると言える。

「社会ネットワーク密度」と「社会ネットワーク内での言語接触」は、言語変化促進の要因と言われる「対面 (face-to-face) コミュニケーション」の影響を測るために加えた変数である。結果を見ると、友人間のネットワークは密度が高い方が、平板式対応の生起に影響をもつと言える。一方、起伏式対応にはほとんど影響がない。「社会ネットワーク内での言語接触」は、両方の変異に影響しない。

スタイル要因は両方の変異で台本会話の方がアクセント型交替との関連が見られる。起伏式対応は負の方向へ ($\text{Exp}(B) = .68$, ただし $p < .10$), 平板式対応は正の方向へ ($\text{Exp}(B) = 1.62$) と関与している。理由ははっきりしないが、台本を参照しながらの会話でも単文読みより多少自然さが増すことによるのかもしれない。

4. 研究成果

以上述べたように、Kubozono (2007) などが指摘するマスメディアによる言語接触とアクセント型交替の可能性については何らかの関連があることを示唆する結果が得られた。マスメディアと言語変異の関係については、これまで統計的検証が行われたものは少なく (例えば、Stuart-Smith et al. 2013 など以外にほとんどない)、今回のような結果が得られたことは今後の言語変異・言語変化とマスメディアの関係に関する研究に大きな影響を与える可能性があると言える。

以下、本研究の成果から今後の言語変異とマスメディアの関連を追及する研究に対して与えることのできる指針を付す。

(1) 欧米の社会言語学では、たとえば Chambers (1988) のように、都市部の下層市民たちは1日に何時間もテレビを見るが、そのことばはテレビのことばに似るところかむしろ離れていくという例をひいて、テレビの視聴は言語変化に体系的な影響を与えないと言われてきた。しかしながら、これは単純な「刺激と反応」にもとづいた仮説であり、テレビ等のメディアの影響はそのように簡単にとらえることができるものではない (cf. Stuart-Smith and Ota 2014)。

ただし、対面の言語接触にしろメディアに媒介されるにしろ、標準語を「継続的に浴びるかたちでの接触 (exposure)」が外部からの言語変異の取り込みのきっかけになることも否定はできない。言語習得期の子どもたちの言語認知のメカニズムを考えた場合、言語接触場面で認知システムがどのように機能するのか、どのような場合に外部の言語特徴の取り込みが生じるのかなど点から議論が必要になると思われる。本研究においては、

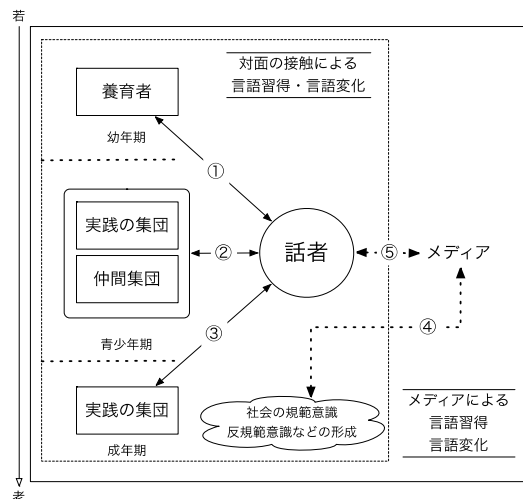
接触 (exposure) の指標として「一週間にテレビがオンの時間長」という変数を仮定して分析を進めたが、他の独立変数との相関係数 r が 0.4 を超えるなど相関が疑われたので、この変数は最終の統計モデルからは除外した。この変数と起伏式対応とは $r = -.344$, 平板式対応とは $r = .120$ と、従属変数との間にも多少の相関が見られる。この調査ではテレビの電源が入っている時間という意味で質問をしたが、集中して視聴する時間や集中の度合いなどは不明であり、これらの点についてもさらに細かく調べる必要があると思われる。いずれにしろ、接触 (exposure) という状況を言語変化へつなげて論じることは少し慎重さをもつべきであることは疑いがない。

(2) TV 番組視聴とアクセント型交替の関係について。起伏式対応変異では「情報系番組」のみが正の関連を示した (1.47) が、「ポップカルチャー系番組」はそれとは逆の結果 (0.74, すなわち起伏式の生起確率を減らす) ものと認められた。対照的に、平板式対応では、「ポップカルチャー系番組」が確率を高め、「情報系番組」は影響がみられない結果となった。また「子どものころのアニメ視聴」は、 $\text{Exp}(B)$ は 1.04 と大きな影響ではないものの、有意な変数と判断される ($p < .01$)。「情報系番組」では言語的要素を含め社会通念上の規範的な要素により構成されることが多いこと、反対に「ポップカルチャー番組」はむしろ脱規範的傾向が強くなることを考えると、この違いは単なる言語そのものへの反応というより、情報系番組やポップカルチャー系番組が「提示するもの」に向かうわれわれの意識の問題というところをえ方をすべきなのかもしれない。なぜなら、メディアが「提示するもの」はテキストとして解釈の対象となり、その意味の読み込み、読み替えの中において言語変異ははじめて「社会的意味」を持ち得るからである。上述の接触 (exposure) との関連でいえば、ある言語変異に触れ続けることはその形式の認知、言語システムへの取り込みに通じるのかもしれない。しかしながら、その際には必ず何らかの解釈の作業が付随していると考えられる。「情報系番組の視聴」が起伏式への、「ポップカルチャー系番組の視聴」が平板式との対応への親和性を表しているというのであれば、アクセント型の交替は単に言語的な影響だけを問題として位置づけるのではなく、これらの番組カテゴリーが話者たちにとってどのような意味をもつかということとの関連でとらえる必要があると思われる。

(3) 以上の結果を考慮すると、言語の習得、変化とメディアの関係は以下のように図示できる。

一般的には、幼年期はおもに養育者との相互行為により言語を習得 (図中の○), 青少年期は仲間や実践の集団 (様々な日常生活実践を共にする集団) による言語的影響を受

け(), 成年期には職業等に伴う生活実践の集団の言語特徴を持つようになる()と考えられる。言語習得と変化にこのような対面の接触が重要な役割を果たすことはまちがいない。



しかしその一方で、メディアはわれわれの意識を形成する様々なものを提示する。そして提示されたものは、間接的には社会の規範意識や反規範意識などの形成に影響し、言語習得・変化の場においてはその背景として機能する()と考えられる。さらに、メディアの直接の影響も完全には否定できない()。これらの点は、言語学だけでなく社会科学や自然科学との複合的な研究を行うことによりさらにあきらかにされねばならない問題である。

<引用文献>

Chambers, J.K. (1988) Myth 15: "TV makes people sound the same." In Laurie Bauer and Peter Trudgill (eds.), *Language Myths*, 123-131. Harmondsworth: Penguin Books.

窪園晴夫 (2006) 『アクセントの法則』岩波書店.

Kubozono, Haruo (2007) Tonal change in language contact: Evidence from Kagoshima Japanese. In Tomas Riad and Carlos Gussenhoven (eds.) *Tones and Tunes. Volume 1: Typological Studies in Word and Sentence Prosody*, 323-351. Berlin: Mouton de Gruyter.

窪園晴夫 (2007) 鹿児島方言のアクセント変化-複合法則の崩壊-. *Kobe Papers in Linguistics* 5, 111-123.

Stuart-Smith, J., Pryce, G., Timmins, C., and Gunter, B. (2013) Television can also be a factor in language change: evidence from an urban dialect. *Language*, 89(3), 501-536.

Stuart-Smith, Jane and Ichiro Ota (2014) Media models, 'the shelf', and stylistic variation in East and West. Rethinking the

influence of the media on language variation, *Mediatization and sociolinguistic change* (Jannis Androutsopoulos (ed.)) Walter de Gruyter: Berlin, 127-170.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

太田一郎, 鹿児島方言のアクセント型交替とその要因について, *人文学科論集*, 査読なし, No.82, 2015, 頁未定.

太田一郎・竹村亜紀子・二階堂整, 鹿児島市方言話者の語彙音調型選択について, *人文学科論集*・鹿児島大学法文学部, 査読なし, 2013, No.78, 1-10.

〔学会発表〕(計3件)

太田一郎, 鹿児島方言のアクセント型交替とその要因について, 第39回九州方言研究会, 2015年1月(熊本大学).

Ichiro Ota, Hitoshi Nikaido, and Akira Utsugi, Tonal variation in Kagoshima Japanese and factors of language change, *Methods in Dialectology XV*, 2014年8月(University of Groningen, オランダ王国).

Ichiro Ota, Tonal change of Kagoshima Japanese and the impact of media, *Urban Language Seminar 11*, 2013年8月(広島).

〔図書〕(計3件)

Ichiro Ota, Hitoshi Nikaido, and Akira Utsugi. Tonal Variation in Kagoshima Japanese and Factors of Language Change. *The future of dialect*. In press, 査読あり, 頁未定.

Ichiro Ota and Shoji Takano, The media influence on language change in Japanese sociolinguistic context, *Mediatization and sociolinguistic change* (Jannis Androutsopoulos (ed.)) Walter de Gruyter: Berlin, 査読あり, 2014, 171-203.

Jane Stuart-Smith and Ichiro Ota, Media models, 'the shelf', and stylistic variation in East and West. Rethinking the influence of the media on language variation. *Mediatization and sociolinguistic change* (Jannis Androutsopoulos (ed.)) Walter de Gruyter: Berlin, 査読あり, 2014, 127-170.

6. 研究組織

(1)研究代表者

太田 一郎 (OTA Ichiro) 鹿児島大学・法文学部・教授
研究者番号: 60203783

(2)研究分担者

宇都木 昭 (UTSUGI Akira) 名古屋大学大学院・国際文化研究科・准教授
研究者番号: 60548999